孝子善之亟感得傳

上

へ 13
3275
1

へ 13
3275
1

門 ハ波5 1344 巻 一之
門 へ13 3275 巻 1

但州

孝子善七丞感得傳巻上

奥州伊達郡南半田村田所とゝ称し松望と号し原とゝ
ゝ称ぶ方車不潤の地なれども天性
ふかくありつゝはさすがもちたれども直そかりたもつかりかいなく家不
孝行乃ものゝ子どもなりく。正直
順かゝる人とゝのそなとなし。其いなを吉四郎とゝ称し第二人まり
然るに若し亜業小子母の為小分命をうりて孝養をなす
そして言語れ及びざる行なり曾て十三家の村里和尚
屋久左衛門とゝ称し武士あり。或時吉四郎宅にて酒宴
酒に及ひ久左衛門俄に力弱き扶を吉四郎を訪んとゝ言
幼おりとゝ云へども共今ゝ訪ん事とすれ共吉四郎

戯得傳 上

止めんとして、若し亟三ケ所まで手を負へり。然もひるまず
刀をもぎ取らんとす。若し亟母の刀を奪ひ取るを不ふ。若し亟母の刀
つき、二人して漸刀ばかりばかりを奪ひ取る。三所に深き
ありといへども数日療治して漸く平癒せり。其疵の痕
不今くわ残まり。又亟四郎生涯邪見にて、のしまあ
など寺社へ参り、祭法の産へもつくるもあれば、つを
用ひて呵して止させ。常に三宝を誹謗せり。其現罪報
徳四年三月の比より病を患ひ、秋の比より人前
乃変もけハしく、ひしとす。病床に折節は稀に醫療をも
なす其験もなく、形まさに枯れ、悪臭甚し。仍て
親族其外は若もうとみ果て、出入の者なし。富郎元より
貧き者なるゆゑ、かく永く病ひぬる迚、別又は煙も絶てにぬ仍
如ず其翌年の暮年貢不足にて地頭よりきつく責る。亟郎不
及ずるゆゑ、若し亟其年十四歳なり母と公儀合せ、亟八山小屋で
薪をこり、夜八母と共に粥をすゝりすゝり絶食を編儀なし。
毎夜名の知れぬ迚で働き、翌朝薪を折の陣屋へ持ひ納む。道一里余り其
苦しみ堪たるゆゑ、村中の者も今に感ぜぬもなし。実に或醫師の云ふ癩病
は薬餌に白蛇とよるものあり。則ち病癒治せしめ
若し亟疵、則仙其白蛇所にあり。此道五里あり。薬店あり。白蛇の事を
いふにはなり。長かごをかりられば、人と一白蛇にて、おきふしなれた

慈得轉
慈種

集りて糧よ庫へとと知い居く指図されし章工懐中せ寺社
行ふあ山みせく粥白蛇を洞へ流るる。百まがくしく思ふ我人
間に生れてれもへるに物ふるだけいね分そハ生ても
甲斐なきも也宿へ帰るバ即時に自害せんと思い極めれバ脇
塞りて。往来十里乃道なれども晝食こたせずして母焼飯二ツ家工
帰るに。母病重く門に立居るをみく。元を流し。涙を
流るハ我死せば。父母の嘆きいかばかりかん。母病人を抱ひ物多
けいとるも誰かハたまくべきを思ひて自害せすこい止めぬ
けハなるハ仏神に祈り外なしとこいて。猿宮ハ幡宮（世の時
参りし。父の病快癒を祈らんと存ぜられ。年も既工月過

に及ーるバ翌正徳六年（改元ありて享保元年
なり）五十八歳なり）正月十日の夜より。雨
ぐ初る。折ふ半田とて不ハ。ふきて寒き氣はよく。波小言出りて
常に大風烈ーく吹あるし。夜ハ毎日雪降る。寒き氣を
烈ー。其年ハ殊工大雪なりはぐき。世年れ人さく書そ
往来まれるふ。幼女の身夜ごと小年り得ぐ。さるもハ思
られ。代るふ。次年ぞりに紀か。元より忘ぐ。てもなられ。
き布子一ツ着く。素足工ふ。ぐつ。初まぐき道法ふを人
毛どりるふ。吹雪工道も。ぐつ。命もあやうきる。
なれども。年り着てハ別寒年工。ぐけハ。ハ人ハ
ハ幡宮れ慈悲ーて。父ぐ恵病年金さ。ぐ

其美論を述りはまでハ。年月をかさねてもあらうく清にて
もしー又けいく元年に伊で我命にて八幡に詣して文を快然させ
ゆくと一心に祈念ー毎夜思ふ時より社の縁に寄臥
南こそ八幡大菩薩と唱へおりて居れる。晝ハ終日後世のことを祈
念し父母をかくれたまへ世ーて毎夜深更と思ひ出して泣るる。
七日ふあるる寅の時ばかりに寒前ふるひぶく九ゆれ年二十斗かと
さんくさを指公家一人冠束発し白き垂髪白き袴をゆ。弓
矢を持白馬に乗りて多くの武士を引て。氣高き声にて法文
をあるく家に祈り志深くして忍れども悪業不感の病あれハ懺
せんとかくるべーそより南ふあるりて乘折の某所如来

又釈勝寺村の観世音へ毎夜詣て。丹誠を抽で祈るへ。
感験あるべきぞ。故汝九月十四日に出生せり。汝が前生ハ周防国の
山寺にありしかるりしぞ。志仏法言を学ー若源こそ人間
のせを交さりされども善治の法人を乳るもすー。或ハ僧の法
衣を喰破りさて報まて。飛人こそ畜人と生るべきなれば。汝源
に報る故ふ吃といるれるぞ。今汝こそ志仏五百返を授く。一生
を誠こつとあるへ不吉も次第に去て。来世ハ極楽にたもかるべし
るぞ。と夢に教へまして。我心元ハ八幡大菩薩と宣たく
思へ。忽大風吹来り。四方雲覆く如く。婆ハ涙流ひぬ。行なく
夜も明ねんば家こそ。毎こ日が生日を問こ。神の出告ふ嘉

毎月ごぜ。九月十四日夕の時分とぞ。ゑこ原山下の沢を出るとて。
信公まのあたり時と語ず。父が病快復するとこん。毎夜三ぢに糸
語ちんと。心中小松公物を宅より八幡文へ十四町余丈より三町余丈より欲ちきく七町余あり是ゆへ後八三所多給のうち毎夜うりにゆ
こゝとハあすがき所ありとけ示沢を行
そうふちゝ〜セクるとゆ
拙寸七日より毎夜丑の時こゝおくゝ。こゝ西へ行るゝ。為ごぜ。志うれ
ん毎夜のるとつひ。後日後世ゝ人ゝきこつうれて休るる
ゆへ。糸語の時刻をうれめるゝ間ゝ。仍て火縄こ火を
付ゝ。糸時より夜半ゝ限を樹立。火縄を結
の間ゝ。ちゝ〜ゝさみく度〜ゝ。火縄不ゝまで燒ゝ。ゝ。ゝ。ゝ目を
見ゝ。凡雪消れゝ。水をあびてゝ語ゝ。火縄ゝ。ゝ。ゝ

八幡大神より日課念仏を授りしより後ハ座をかへる事少ふ
暇へ三許小懈しても念仏をのミ称へ給ふ
○かくて廿六日の夜なりけり。薬師堂より観音堂へと途
中生瀬沢といふ所まで来給ふ時、大音にて是を止まれと呼ふ
者あり。此時前面山々大木の枝も倒るゝばかりなり。
恐地どろきてみれば異形なる者其長八尺余り赤鬼青鬼その
間一町ばかりに進来りぬ。肝魂も消え失せ道のほとりにたふれ
伏しけるが暫く有て心地いでき首をあげてあたりを見
廻せバ何ものも見えず。かゝる事あらば毎夜
通路も叶はじ。是より立帰らんと思ひけるがされど思ひかへさる大
所願成就せずして止らんも口惜きなりとたりしゅへしとく。
それより観音堂へ参り。通夜して東雲わたる頃かへりぬ
○二月二日の夜。薬師堂より観音堂への途中にて妖怪の有斗
の山伏忽然と現じ来り。汝父が重病をなほしたき為毎夜之通
路するは哀なる孝心なり汝が所願不日に成就を
遂さすべし。授けたる宝物あり。持ゆきてかたじけなくいたゞけ
我ハ是山神なりと宣へバ忽一陣の風吹来り雲おゝひて
草木震動して行方ハしらずなりけり
○又或夜観音堂へ通夜せしに。前庭にて大きなる声せり。
見しのぞきてみれバ頭ハ牛のごとくにて五間ばかり其丈なる者

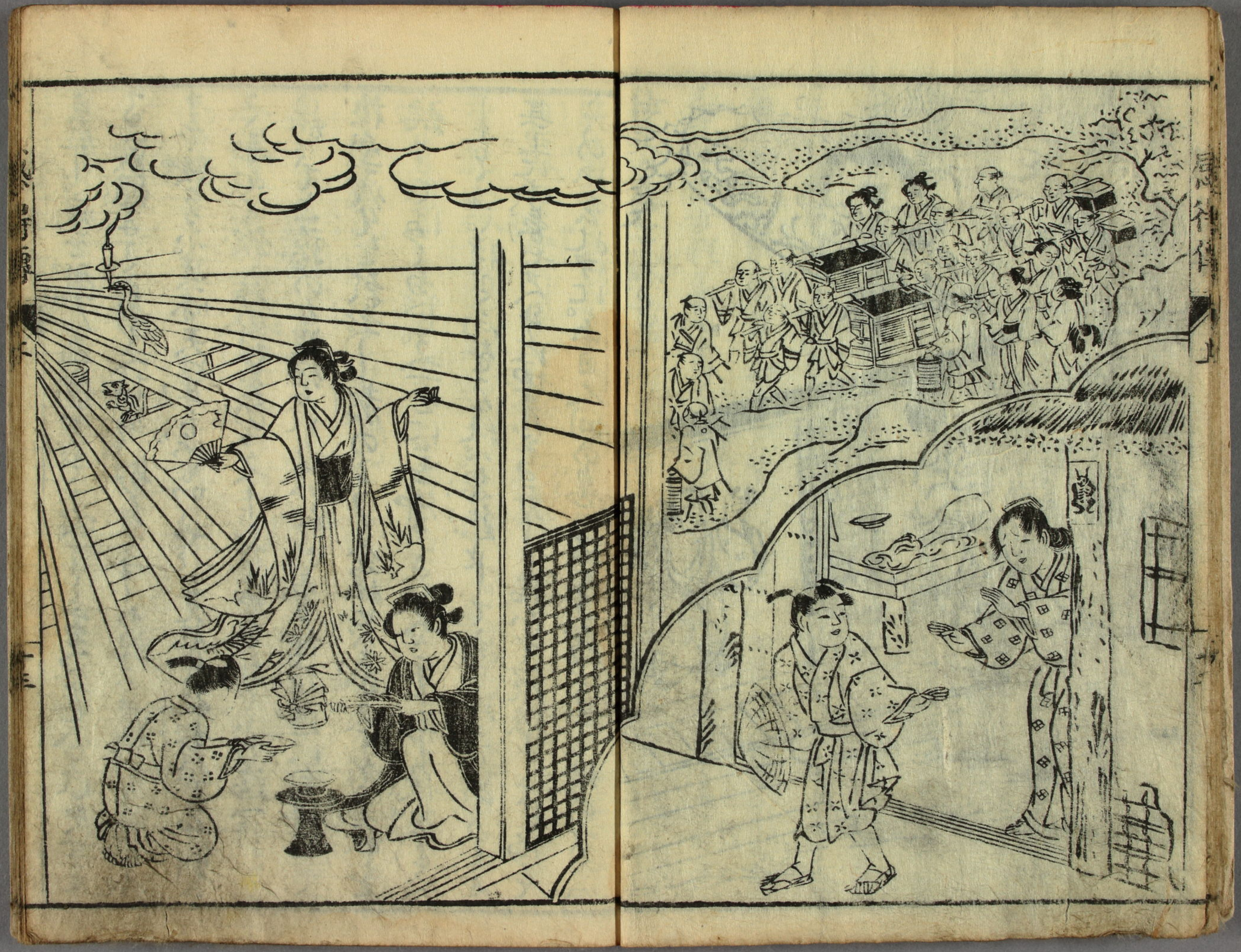
こゝろ口より火焔を吐羽ゝをゝきして堂中を見かゝるに堂おそれおのゝきて。高聲こゝ念佛ヤセーなば。こゝ物消ゑ失くなり

○同六日観音堂小通夜せーし寅刻だうに其長堂の形端としひとしきたるゝ姿の者八人来り。其内一人大音ゆゝしく食物あり。明夜八宿取く食べーといひて堂内を見令一人ゞ聲ゝそだゝき念佛をヤ居れば。すぐきやう明るゝと喧く。其足音堂もゆゝ紀ゆゝりてすさまじ。高く座堂内ゝて物ゝ〳〵念佛ー居る内ゝ。夜もゝでみ明ーしゝ家ゝ内ゝ

○同七日の夜。ゝすひハ必変化の物ゝ命をゝく。きゝゝ一定ゝ

やゝゝゝひ。ゝゝゝ酒を祝ゝ並。毎ふ服ゝの酒をすゝ

に沿て四方に流れ出る酒人もさそうに成て小孫をもこがれて
し巫論方々へ歩いて人ともけ〻ば名酒樽を二人荷ひ
ぐ〻て立ありるが毎日ひ〻孫こうつき来て
祈願あり人ども呼入れ〻て年寄りは其夜祈願堂に通夜
会師十二伝りて結構なる宗物二千供人二十人ばかりにて参る
上まで かさあげられば堂内鳴ら物白書あり宗物
り女性出結人八三十家だより今一人八十七八とうて名なる
巫公小作地蔵の奥方ひそ〻ひそまり居るが其内
三十斗の女性ひそ〻巫〻し祈願人の人ばれすう近く立ち新人八
法又が病を歌ら歌ろ〻ひそ〻ひそ〻する其公の法ぶむ



云ふ。疲を慰んとて酒をあくしたべしと宣へ。ナセハ法はれ女こん
る。飛みくるを追ふ。酒を指出す。敬ふて すわ法人を打いなをさこ給
まで飲ろふ。其味天上耳嘉もかくやと云へり。配偶れ女即別室
くあるく。歌舞の技をひるがへし。ぶ者を空ぐ。わ法ても
○かくて上蔵の女房。法只方精進に念佛して
極樂往生を願ふべし。都のごとく会仏せば永久の苦を
況んや。ほとんど又一公に念佛中さばいかが来病も快然まべ
しと云へり。時に向をうれば。怨怒ゆとして高聲三つあらはる。
其上にれ長七尺ばれ地落当る。しばらくして。法師。
そのれ云はけに。毎日人間の悪三万七千度。悪も佛の方一八

ほ。第三悪の方八ばるこ法くも。命終の時は西方
悪鬼こ来ずして。三悪の方八隨まべ。念佛を唱へ浄土
を願へ人ば。三国一乃智者なるべ。又称名ばかりあるくハ
往生はごとうべ。念佛を疑へ者のハ。後ろこ八千里
で極樂に遠ざかる也。又実に念佛する人ハ法花経
毎日千遍読誦ましまして。ぶ。こ流と行云ふ護念法
念佛一遍の功德八十八億八千億劫の罪を滅するなり。
ほまべ。そこ。とさるべ。仏ら所ばかり。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。
○二月十二日。二月十二日こ歌ばとをはけ。
ども。いつものごとく支度して法でまるべ。ハ時宮ようまま

呼吸とゝまる坂下にて吹雪に逢ひ路もうしなひ吹雪のなかへ行くり。丈あまりの雪の中に落入りよろんとまんぐ叫いぶ。泣さけべども甲斐なし。況て身も老てにてありしが。我佛神を立願し。十数果さべ。て命終らべ。の病も又快復をねがへ。ども。全念のあらんとぞ一命はるべ。

所詮そゝ。丈の病をのゝ欲ぶ。例乃孝心おきぶ。

後。雖ども。ねがへ。ども。急ちよとり髪を引上らる。者し。

昨びたゝやとゝりえれば。其数六十あまりの老婆

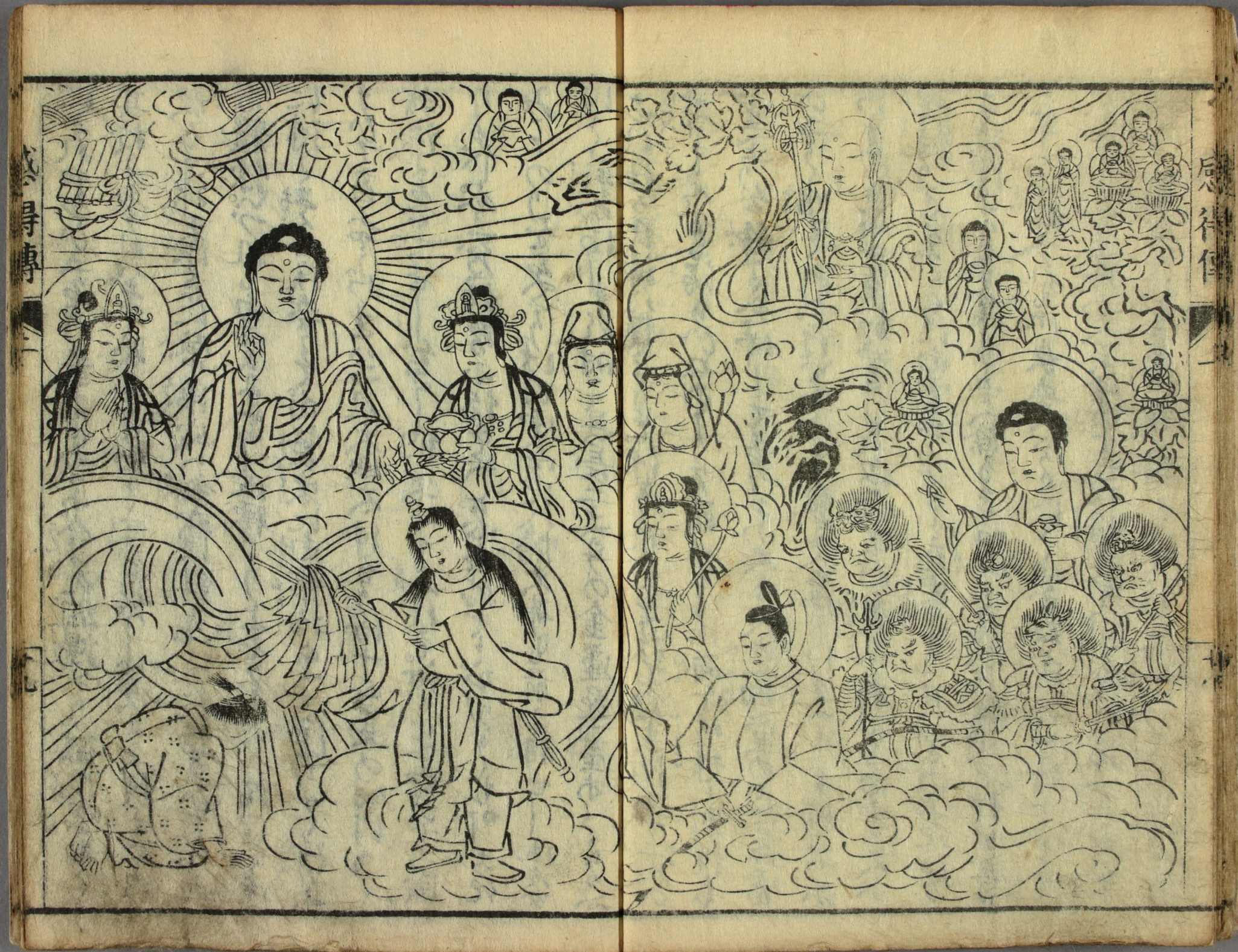
さ衣を免り。白き裸裔馬を曳来り。者し。

雲行掃ひて波馬に乗を待入。波馬の背より降れ

感得傳

乃わく燈立のみるとこんるふ小無分たちまち屋うふなり。春天に
長閑なるがおとくに見えれば。拙はれ信州馬籠さんでいるといふすり
宮人則龍がごとくゆを去りぬ。志げしが百小菜師寺に見送り
亟馬より下り堂みのぼりて礼会し堂をおゆへば彼は信州に
はいりて又彼一百にれのせ送り給り
○菜師堂より善光寺のかくちゆるる十二人幡天蓋ゐで足ゐぢし
ゐまひて馬の前後をかこみて送り給ひしが其門一人の善光寺
仏ゐれ一ハ。善仏一て極楽に往生する人をバ我十二人そかくれわく
送るぞと宣ひゐる
拙記者雲にく。馬より松ゐ下り給ひて善光寺ハ我ハ

古れ伝ゐ氏神八幡なりと。仏をれ光を放て飛去給ふ十二人の
菩薩ゐ。ひ消ゐひねおまりゐ有難く尊し。此跡を伝様し則観音
堂上り公弾く念仏一て居ゐるふ大ゐ光物堂の門前雷
のごとく宿ゐれば。ごけいふと言ゐ多の人念仏ゐ光物ゐ
つまて寺内四方にかがやきしが。忽ち堂門前大ゐ白雲ゐ
群起りぐんぐうちに白雲ゐ充塞せり。其雲の上左右
ゐ弥陀の三尊各ゐ長五尺餘ゐ観世音
三十三番ゐ。ゐれ長五尺ゐ
に紫ーて立給ふ。又菜師の十二池坊と云ひ
ふ大さ一圓ばり九合色の宝樹あり。大枝三つ三ゐれ。傍四方


感得傳 一
感得傳 一

にこれあり。五色の華あざやかに。金花爛漫として。微風吹来れば。其枝ことごとくに。嘉音出て耳を驚かし。次に又種々の香を散ずる。弥天花に幣帛。或は鉢盂。或は鉢盂などの数指のひて。凡五百體餘。いづれも白雲のごとく。腰よりしたをつゝみて。指て。ぞ中に。ぞくきたる姿して。白袈裟束に白帑指ぬ。つゞはぎ。清潔まひて。ぞくまつはれ。天照大神。春日大明神。我滝の春宮せーなざーの約束して。忘れぞ。汝が宝寿六十二歳なるべし。今一度伊勢小俗ぞ。心おぼえぞとかけまくもかしこき。みことのりを。受うけ。時雲中に八幡大菩薩も前に拜せしに。姿にて。新白帝まんぼう。其長二丈ばかりの金蓮花一茎あらはれる。ふ

り伺ぎてうんぬんぺ地蔵菩薩は長七尺だりけれども黄珠錫杖
を持く立給へが告て宣ハく。汝一文が病由をうんぬんとて。
楊枝を柄を指出し給へ別時び取出ハやがて消うるる蓮
花の葉に乗せ給へ。我身の浄きる焼公麻ぐるまと
のやく光ぷそれより北の方へ行一歩せ給へと男女よ。是小高
乃ゆう如ぬけりなされ。菩提よ乗給へ白雲一色
につき乗ぶして離まで菩提の頂上を辞し給へ光明殿
く松明をつんるるやく光四方にりでやき。其徐光菩の通りる
させ給へ所二所徐もかくやきゆ菩の光相好のいつくし姿
いとん方のくさくさく光の扇菩に陸ひきまりて至に仏界へ

くだりて五里ばかり高にして二百間もつづく。幾千万とも数も知ず。羆人どもの物をもいとゞ不ずくしと思ひて彼方にて見たるものなり。

上くだりの道のりは、ものくてやはりで公家侍衆くるまにて行ける道

往来百度ばかりもかさなれば、半田村より伊勢(行程九二百里あり上下ともに八日百里の道なり)下男(下りなれてはよ向ひて行く事九二百里ばかりなれば尚の方

よりまたまたすさまじき巌石をあつまる大高山あり。中程に居長二丈ばかり老婆一人あり。其髪白くして膝のあたりまとまれり。肌膚白く片袖なり。眼の大さ六七寸ばかり。眼の光にくしかはしい。若眼を塞れば、ものを見ることなく。其眼の光にくしかはしい。也口鉗より耳の際まで切あがり。上下共牙ばかり遠くなりて出来る

羆人をおそれつゝ、はらはらとして、もしもよりて、ものいはんとすれば、二月と八月とは、必ず老婆のうしろに大木あり。校ともふ白き帆ものゝ如きものを負ふ。羆人と見えて、男女共に眼くぼく入、牙抜ひ、口長く細く、脇大よりて、哨ぶくかくの如くなり。

どうかしり。婦人男女の区別もなし。

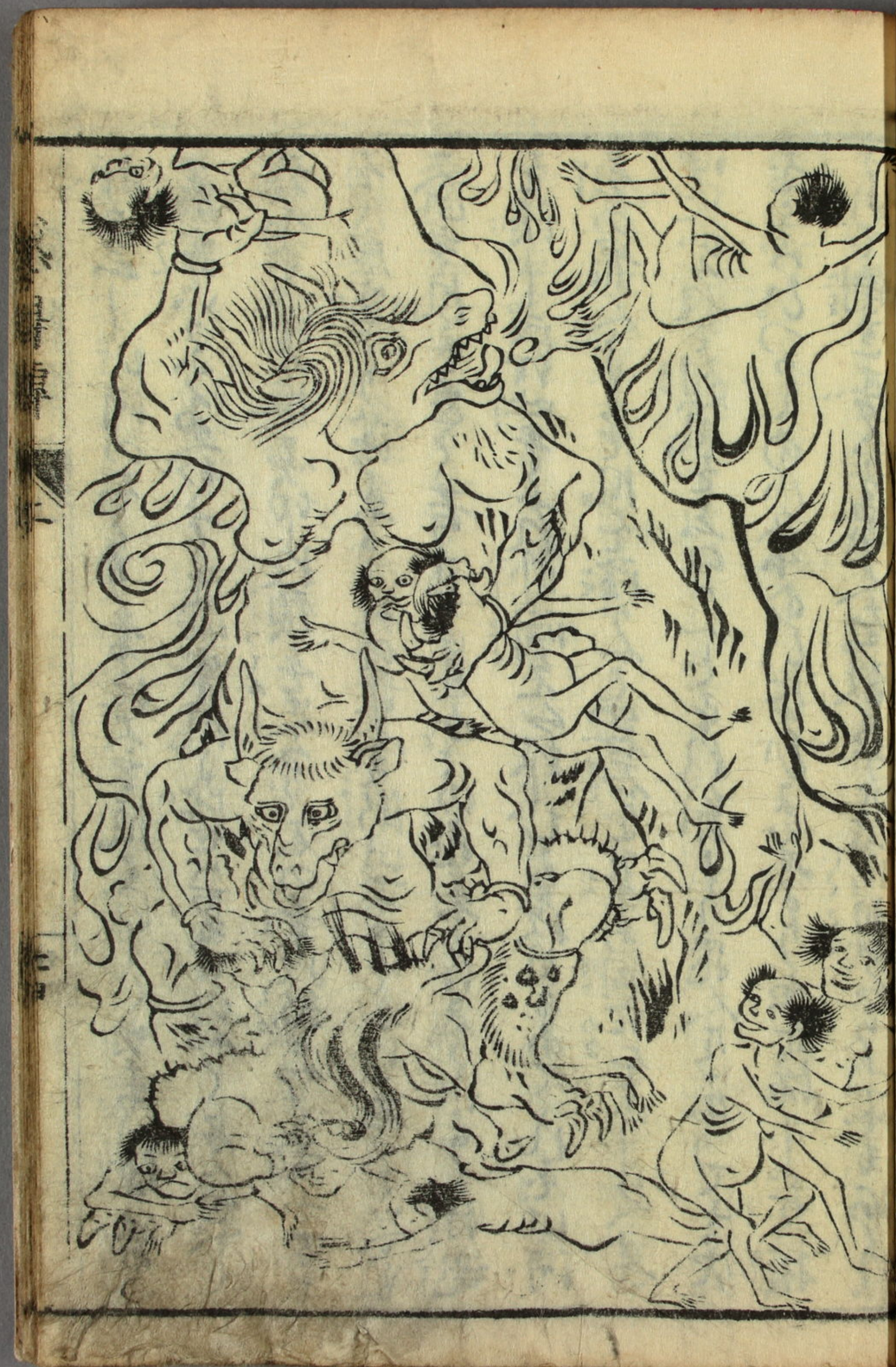
白く色既と見えしきは、数多て高くうたてい

○獣卒其長八九尺ばかり。或は牛の形、或は馬の頭なり。熟々の毛

鍬の如く逆に生ず。牙より常に猫なりえ出。羆人を見て腕をいかし。

あたりを呼ぶ。雷丸し。羆人を見たるものは、肝魂を失ひ、おそれ

果てる体にて居るなり。獣卒は其羆人を一人も残さず殺戮



叫こ磯たを[illegible]ぶか血を打立ち方へ川さけへ流より里に留まる其後ありしくと刷き出ぬる獄卒たちしろへ投ぬて或ハ罪人の足を取こ鞠乃わく虚空へ跳あげぬまへ落て此罪人虚空に跳あげられこ木の葉ハ数みぢるに異ならず。須臾有て其罪人ハ谷底へ落来る様こ成て上こ落こりて惑く打ひしゃ。骨ハこ歯つきほり火福を出せるの心地しこのゆへ多くこん方ハ一時ありて罪人ハ消しこ紀上りぬ苦しみ深く苦へ出ぶ[illegible]ていはこて皮をそぐれざる罪人ハ一人もなし其刷取を其皮を獄卒ハ集めて食食する体なり。ますりゆく

さ紀こ大河あり。さ紀の水の色墨ハ[illegible]て流れこの早き事矢

射るがゆへしばし河のほとりハ常に大寒風はげしく吹来り娑婆の
極寒いふばかりなくして九州寒風に比せバ夏日のごとく覚へ也し。
罪人どもハ寒風に吹切れ頭手足など木の葉の散るがごとく数千万と
なく虚空より落来るさ紀の罪人ハ凝しハ下まで吹はなちとへども
又ひと風に吹きて苦しみ足などの飛来るがごとくぱいよく肝魂
を消し血ハ吐きそれ骨ハ凝えわれむろ衣目もあてられず河
辺の罪人ども寒風を防がんと岩石を集め洞穴をこしらへ其
中にかくれて烈風をさけんとすれバ外より罪人ハ来りて其穴
をうがちつくしあひ喰あひたがひにかより血を流し折檻
くれて倒れ居る罪人を。獄卒ハ一々列裂くらふ事もあり。

〇又腹の大なる罪人どもハ河原に嘆き居て石をかみてをのれ
頸を折りながら血をなめくらふのにてさけびつゝ居るもお
びたゞしげにひとり罪人苦しを追付て大地にたゝきつけふ
せ〳〵我ハ〇〇がおにお果い下へ今は卵にてハ我は不て骨抜取り
なる般若をうけける。念仏ハ追善ハ打拂しまるを血の淵を流れり
又其者の正月五日に大峯にて身清めりし。其ちの迎ざ姉ぎんが参りとお
かしきて嘆き聞へしのえ悪ハけにくきそではなしきりし
〇けふ祇寺くまはるに蓮石すて舟しおげたる大高山あり。高
さ数千丈なるべし。罪人ハ此山の岩間に追詰められ身を打立て数万人ひく
のぼりにのぼらるが道へ地獄苦ハ錫杖にてすらりし。空を峙

てゆきくと。山頂ふ到りそけるとうれば弦の地獄へ巻く月七日

にうんあろせり

○山の頂上弥ふ拓くぐりくと平らたり。藤石沢組あけて

恰狭門のわりたるあり。内に入てうれば二鬼立居り。各長一丈各人だ

うれり。地獄を出ふ沢通り弥べば二鬼すかち平伏せり

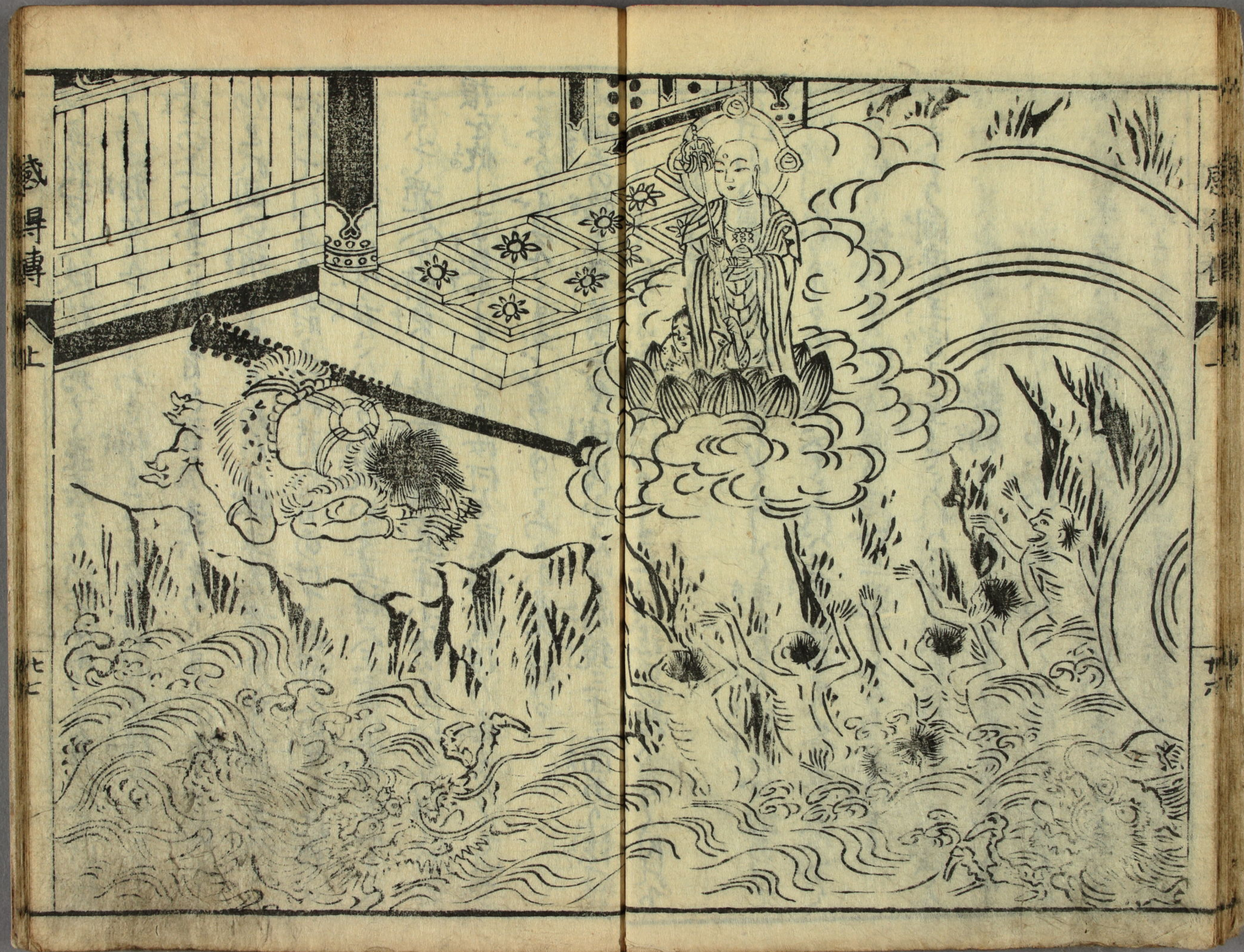
○丈より閻魔王宮ふ至りてうれば閻王の体長拾百丈程ふ坐ゑる

ゲヤー。其色赤くして髭胸りてまでもくさぐり大百の筋を張

燈笼して衆人皆を小ふ弥ぶとたをわして二用とへんつ拓ぶ

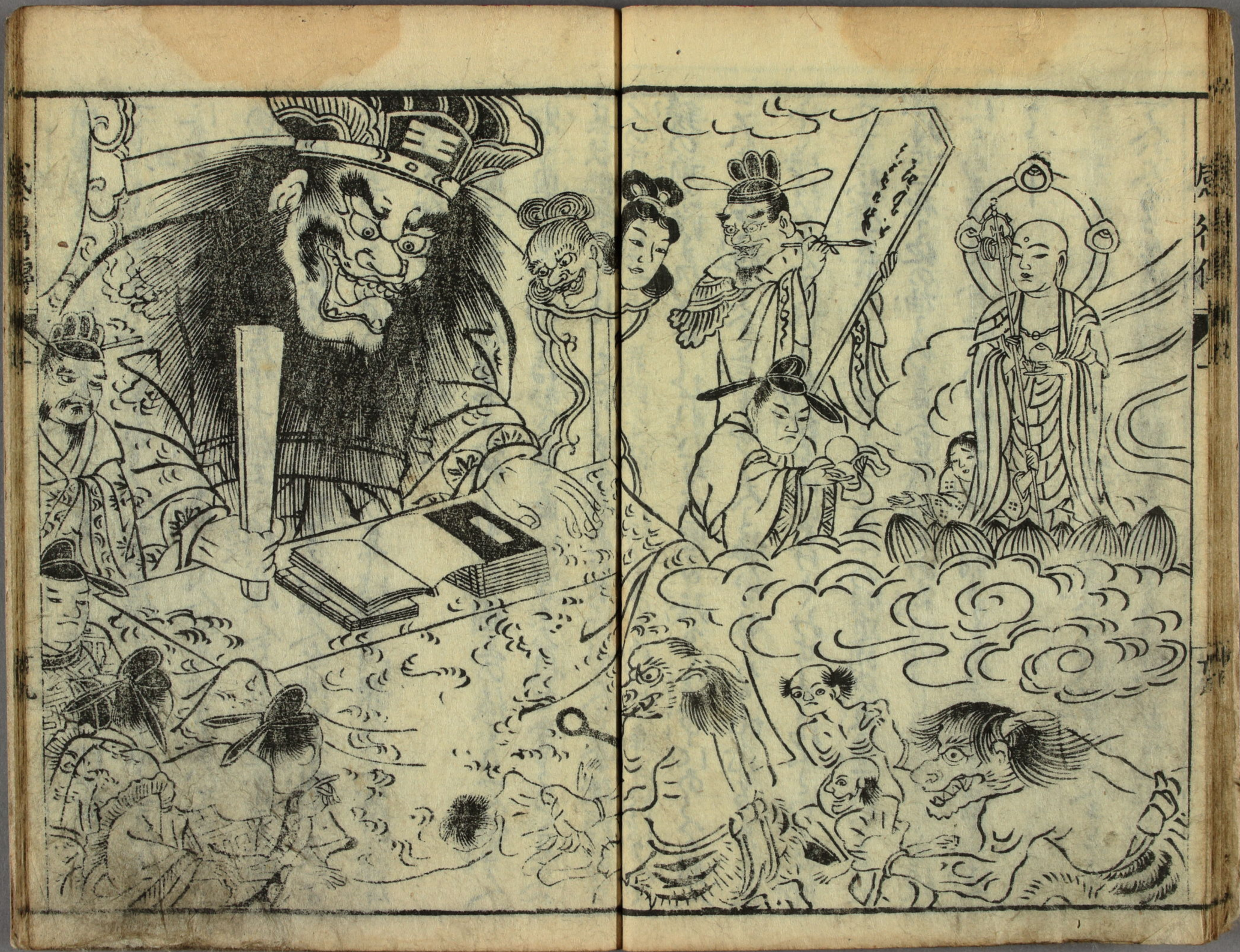
ゆ。此装束の不ふ云ん拓ぶ。閻王乃傍ふ官人と云へ。きが表等

して百人べりもれ居りて又するか未だふ其長一丈五尺ばりうれ


感得傳
七

獄卒数百人鉄杖を持て並居たり。さて西へ来りて罪人を捉へ出
々たる鉄を入て。無限の苦を受しめ。悔まてうる事なしと。
臺の上に赤き首青き首二つ並びてあり。其一の首大なる獄卒
何のまれ圓の鉄とよばりぬれば。獄卒共罪人乃中へ投入れ
みなとして引来る。其時又一の首大音あげて。其罪人の生れ
をつらぬ張さて矛石さいなむ。其時大王雷の震動のごとく大
音ふて。罪人を叱責し教諭し給へ。其中小汝が里にても張しかを
根を作して来る生れ。汝何で無悪を根乃志もなくて世を
ふまるかの云さよるど。罪人ものうぶ不云て侍る
又閻王の脇に。席薦三尊補処ふ。ゆる明鏡三十三面あり。鏡に罪
人の中稀にかゞ人辛一罪過を陳し鏡人のあれば獄卒中にたりんで
鏡の前ふまるんせしむれば一生の悪事の鏡中にあらる罪人
これをうて陳ずべき言葉なく大に悔ひ恥れ恐れ居る。
ふも無慈悲をうんぬと錫杖を中にあげてみせ給へ。
の有様歴然としてくもりなく亟十三業乃時迫所の友達もいざる
八月廿三夜の他の猶ふ青大豆枝ぬもみ赤ひ海りし旅ありくと鏡
にうつまり其外他人のもてる科も明らかにみしかも茲ふ述
ぐこと

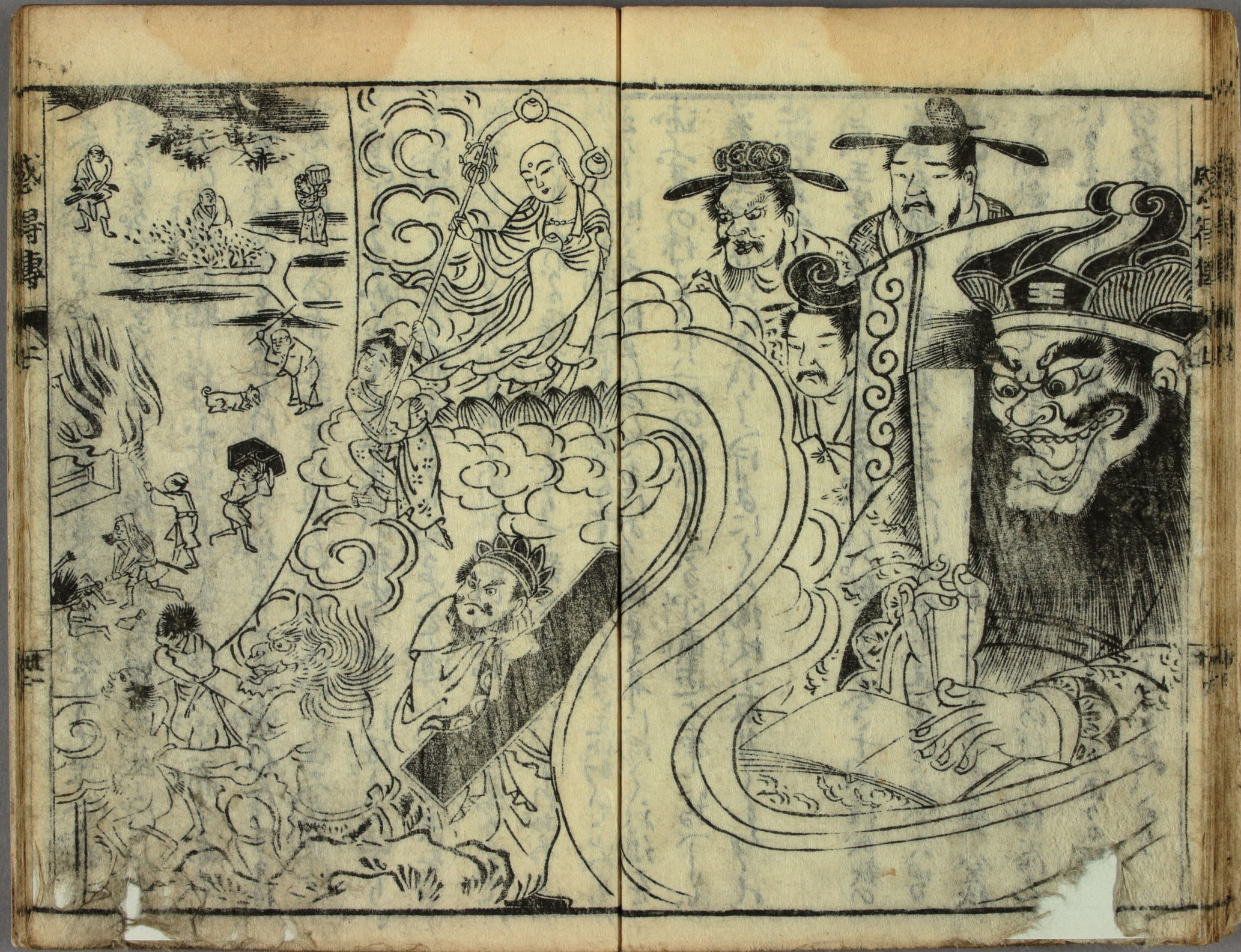
○又罪人を送り出を不あり無ふ威厳ある官人二人そそり
一人八大なる筆状持一人ハ鉄杖を指そろぐ送り出を罪人を向ひ



何事やん仰せられしかば、其中に法華経を書
てうつくしく悪道に堕まるなり。必ず人を恨る事なかれと言の終
にやすれ。華の仰せあれば俱生神にて、人々につきそいてそのまん
の一生涯乃ち善悪を記して、閻王小祈る後人かりと。地獄を閻王
の後ろ岩のたあり。海の底に数多の罪人を縛りて倒小負なる
あり。是を奇々怪々なれば皆僧なり。華は仰せに罪人は二度の海岸
をこえ縄ちくるる事なれと

○華閻王の前にて何事やん仰せられれば閻王の後より一人の官人
出くる奥の方へ行物を指おて言く亟に渡さるべしを受とりて見れば
其形桃果乃如くにして、やはらかふ。其色紫にして大さ茶碗程ある
なり。此を華閻王に向いて色代あり。閻王も華に向くれ紙を
遣わ。華の仰せそれは切の地獄を通る印璽也大車に指べしと。
言く亟行るに八ヶ所にて行くべにくい湯杖小板付こりつれ
地獄をめぐりぬ

○閻王宮の裏門と見えし方にられば。獄卒九大さ十間程成鉄の
火車を挽来り前に罪人三百人ばかりを其車に乗せ男
女の首人と僧と俗七八寸計の大釘にて車に打付。是を罪人義
獄卒九人にて押出す。十間計も挽かせばのぼる猛火
にもえる罪人おさけび悲哀して其火いよいよ
の火車光固とも動くし出。法くれ地獄へ



○まことに堂に下りゆく地獄に至る。廣大無邊の風ありて罪人を吹集居けるぞ。しかも地のまてかゝこゝより極火りえ出ず。罪人を焚はらひ
今あい號叫智騒しぬ。猶ほ小十里ばかりを行くゆくの空二面に赤く
たゝゆたゝぎ罪人ども大山をそれ東西に迫まり。寄波迫れんとする様
也。ゑんるぶ間にその赤き乳次第に迫すれば大山のわく成大火爆して
大浪のごとくすさまじく来りて地に来るゆえ極火ちらばこに落る。大地より
も火盛にして。あぐる。罪人を下より出る火を遮んと。弱き者を下
敷ふ上へとゝろがひて振こあひ。扨かの山もわくゝ出来る火也。
下よりえあぐる極火と。一つになりて罪人を其中につまれ。あわき
叫て焼こがれ。地獄天地も落るべうすさまじく堂えいかりて火も
次第にあつまり。罪人ども清炎て野原のわく炎ゆ。又間も
なく炎かこすり火燃あ。罪人も次第に出来りて又前のわくはら
しあるそ人。その叫聲の猛のわくに圍えひけ地獄の罪人を噴毒の
深き事餘の地獄に勝れり。并れ作れ地獄八苦活地獄とて。貪
欲偷盗悪痴の苦堕るかなりとゝ
○又地獄あり常に大なる鉄火の雨降て罪人の身にあたる。須臾
見の間ずて焼ぬけ。折まあるい脱ぬ。あ罪人の身あくるも蜂
の巣ゝとくあけぬきて。ゆ折むる事かぎりなし
○又地獄あり。大山の上に義女あまた集り居く。禁ある罪人を招
く。罪人これをうけて我さ紀と山に行上るゆえ山の草木ゆ鋸

のぼりく。ちゝも下に向ひて逆まふせこうぞ剣葉に身をさゝれ血
塗れるぐゝ泣てかの山頂よりくれば美女どもやゞて谷へ下りて抱く
車前のやゝ。又罪人ども〳〵るに其中剣林へつゝ入れて倒まさかびし
居たるもあり。谷〳〵遠呼われば。かの美女忽ち悪鬼と成て人音に
て泣叫ぶよ来るも其公な成止ぶもゝ鉄棒を以く数くに打
ひしゝ。罪人ども谷底へふげ沈べ。そちらこちら東方の山窟きかくまて。
大ぐ〳〵打傷ら

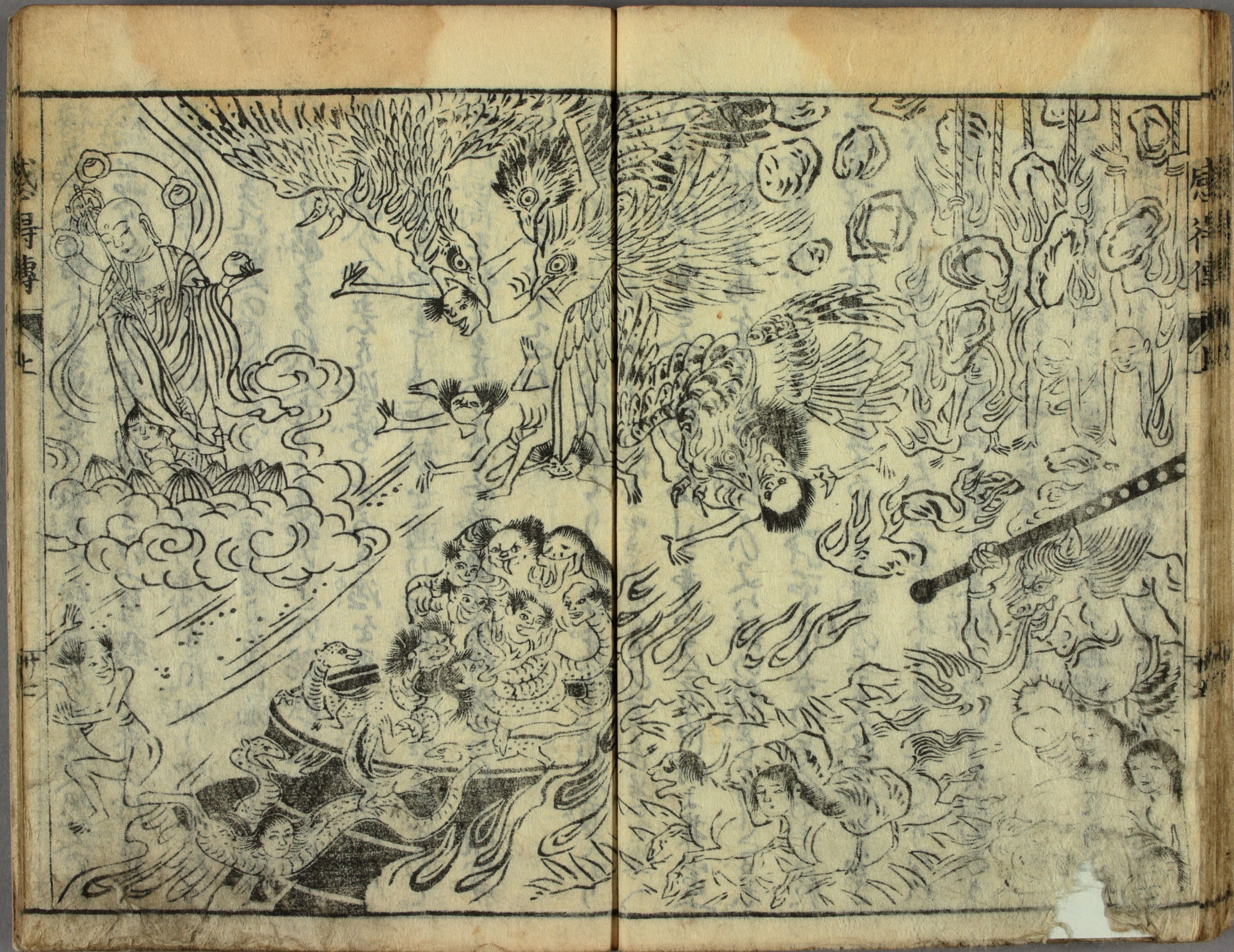
○又地獄あり。此石八谷深く黒闇ふく。ぶけ八ゝ入ざれば。罪人の泣
叫聲。数の多く集りてなくがやくに幽〳〵聞えなり。はるかく涙き
地獄とぞいふ。獄卒罪人を捕へ各一つ〻鉄棒を渡し。是にて汝
等が食物を求むべゝと。法乃罪人をひきみ谷底へ投入れ八罪
人ども互に我ひ天地も驚くべくりもそのおひ〳〵棒を取ゝその
面体掌て命を続く。身体地。其の作ふ山ふの罪人八股中に法あり
て。腦脳をくゝ。真〳〵ゝ平〳〵ゝ。棒に付る人ども時をゐむれば。
ぶゞく其苦痛やむ。ぶのあよ互に鞭ふる絶ぶ。是は彼此互ゐり
や宮人

○又大なる池あり。中に熱湯漫々と涌くり。其音さくまをやきふ。
上よ涙の細き掲くれり獄卒罪人を責てこれを浸し。
掲の中迄より熱湯の中へおろひ落。身体ぶとりぐゝと煮てはて
苦しむ事浪り。獄卒強く鉄をかきて集めて咒をれ。

蟹時傳 上

又牛のやくよ形となる。苦を受あまり地をやくおりひ海に并に間
なる。地獄まで苦をのがれ苦を受ゆと。并宮をくゝ山麓て河
と成河変して水となる。こ苦をうる間苦をうる色どさし地獄落く晴
放。并に光明宮殿をあ〜かゝ事落くへ合色の光明こ苦を
獄中を照し給へり

○又地獄あり。罪人死人を似く胴体八牛馬のやくなる。数々あ
つまり居こゝ。背小大石をはき其上に獄卒一人ゐて。
後より二人の獄卒。火鞭の出る鉄棒をゆて彼牛馬を敲きなる。其
間こゝ一八僧の罪人あり。ひくよとく行まて鉄のわさ出石のと
を敲まはさん。分離はすりく火鞭を吐き罪人共の首くを喰へ。
八方へ引法て吸き合へ抜て海き事いろ〜方法ぬ并宮
ゆ。地獄八牛馬をあ〜けゆ〜近つひ。又八法の鉄生をゆ〜こゝ者。
或八生家の罪人の落る不りと。又ハ西男女の首人おまく鉄
を地よつけ。是法変ゆ〜て去るあり。其磐の上よ大鉄石を出さ
けびられ〜もれ〜又宮より大磐石落来く其上にあこりわん
ば忽ち火焔出〜下の磐石も罪人も悉焼とろけて失ぬかあう
て又なのやく姿変れて。苦をうる事前のごとし
○又地獄あり。深き谷底よ。光ある毒蛇いくらた食
り居て頭をたゝくにより火焔を吐きよ上より落来る罪人


感神傳 上
感神傳 上

待らけ。人の罪人を毒蛇八疋つかはして毒を吸ひ食ひ。又罪人の耳
輪を吹うれば。罪人甚くるしさけび苦悩す。其の作り是ハ
彼飛の地獄くるりと。口より黒煙に忽ち漂ひ。きり風吹来りなる
ふ。数多の罪人の間。女二人男二人生るゝ。男に取美女に蛇蝎
はしくと解とるれば。人たゞちに毒蛇ハ上に絡蟠て。ふげ吉ね其
作るハ人の苦を安落してみき法を聞しに。追善の功徳
て。今此者を免さ也。地獄を通りし時。罪人共言て巫をこんて。
念仏回向を祈りたいとぞ。普通に念仏唱へられど。此分
にぐり会ひてるとな

○又地獄あり。大なる池ふ水をたゝへ。みちて其中に罪人首をひり
あり。水をとられ。罪をそるゝ水底に物を拾ひあさんとする。水を
真まく水つきてとられ。そ法出ず。やり。其言ハ極楽に往生
する者あれば。地獄の罪人或ハ其日れ。ハ法脱る事ハ。
よつて往生の人を待る。千年を経るゝ。侍者に呼ふ。
作られる

○又主人間の。ふ。罪人あまた集りて居ふ。忽ち皮の衣間ゆ
まば。罪人同時にたゞ紀呼ぶ。丸人相戦ふ声。天地も震ゆ。
善悪乃作。是ハ悪業勝負の業。て。財宝をこんぐりて会り
たるもの。堕る地獄なりや

○又数千の罪人を。大鉄石上に依せ。亜ぬ其数石より猛火お

て罪人を燒。罪人は十指よりも火焔おのゝ獄卒鐵棒を以て打。突
すくるを傷今はつくりをいまゝ責をつゞけ責立れば罪人の苦
はひとり痛りあり血乃涙を流しこゝにむ而あり。其の作ふあれ
ども苦の罪人は来る不かりと
○又罪人を倒さかさまを紀。繩墨をうちて肛門より鋸を挽る
地獄あり。其の作ふ世にありしは法人の中を惡しいつ
ちり抜つひさ海こげそこれ者の責らるゝなりを
○又罪人を逆さまりて獄卒面方より鏇を以て打るきはゝ
ゝ骨髓までおり碎ゝ而あり。其實ゝ苦れ人は惡るものをる
中抜みゝ。陸赤ゝ苦る罪人なりを

○或ふるは罪人をあまゝ石の柱ゝ縛りつゝ獄卒鑿鋸罪人
の口ふゝゝ入ゝ鐵鏇を以ゝ上下は歯を打ゝ折かゝ又口を
は舌をあちゝ切ゝ又罪人乃前ゝ稱ゝの鐵合あり其
中より火焔のえあるを獄卒罪人を責わゝ合抱を是此
吟ゝ鐵棒を以ゝ打擲るあり。其此作ゝ苦れ世に
ありしは合抱の事に付て紙ゝの惡るものをるせし者ゝ為れと
○又方面一里行る此深谷あり。其中には未糞泥こちゝ。獄
卒上より数万は罪人をほうりゝ。遂ゝ糞中に投入るゝ糞泥の中
に長三三尺ゝ有る虫ゝ此るもゝ落ゝ。其色赤石竜ゝ如ゝ
まの虫上より落ゝ来る罪人を指らけて苦ゝ責ゝ其身に取ゝ

或は頭より喉こ咽ひぬき。背より腰こ抜けそ。その後身こう事こ裏の
毛をこるがわ。罪人ち業乃ほうの紙をおし。ちぎりげる鬼を
衛く。其鬼ち焼のおとく立のかり。四方ゑ数ゞて臭きこるもの
こるにすの色。時こ業ちくそ。その接きる印を鼻こあ
てよこ。数のやくこれ。ちまりこ入こるふわい出くく。色ち悪臭
を云れぬ。其外劇苦の有様を見聞て考えこ記ずてい。そ
のを月ふあて耳こあつべしせ宣ひ。そのおとくしこ行るふ
かつくれたそれこるこ。こ絶除さゆひき。家こ業泥のほうり。ひ
こりれ罪人あこりの鬼石後ちこひて。漸こ亜こ向ひ。ちぎり
げる教にくいよう。我ハ汝が父ち四方う母なり。罪業こ

くして地獄こ堕てい。苦こ絶しこ。ちまで苦しこ。
子孫ありてなき跡を弔ひ。ちこ斗也。ちこ四方邪鬼に
て。仏ち法ち考ひ。又母の遠忌をもるこ。二十七年の遠忌
こへ。仏事をも営こけが。ちるこをもたもけるこ。
さいなくてあ。我忌日ふ。あ皮まで魚肉を食ひ。汝世こ
帰なべ。ちを四方に行こ。世隠分会仏修善そけが
苦患をすくう。ちこ悪縁を断ん。四方ち形も
快然ゞ。ちるゞ。ちる中に。又数名の底男中に。食入てい。
血の泥を流して。業中に落入。第七仏こ是の業湯地獄こ
て。念仏ち法を。修行する者堕ち。ちる也。後こ長き苦

を又益夢ゆゑ語りしに。母のゆせしてゆくゑ[illegible]とて。
懺悔してゆく
○又百面二里行てまんゆる池あり。其水の色まつ黒なるゆゑに百才
八頭の毒蛇枝泥りもおく。頭をそろへ虚空をまり飛人
落来れり。ゆんまを胴体を五尺斗の大釘にておめれる也
其枝毒の罪人を。毒蛇あつまりて各八方へ引とり口より火焔を
吐き。人きふ吼唯しゆへば罪人は牙すくに刻てうる其毒蛇の唯
し数百千の雷れわく黙し。幷の源ゆ是へ就て向ひ橋掛たる
去の変して書夜苦をうるなりや
○又湯地獄あり。谷深く経石をひへ[illegible]下て廣さ二里ばかり
入ゆる石の竈あり。後の罪人まの竈は中沸湯して落へく。身法
まりぐるる駆け鑊の門をめぐるがゆし獲にかゝきありて熱湯か
そく流き落。其下に小き河ゆゆ河水ゆ冷して法の罪人は河より
跳り出ゆ河の上に是雲大きふおひひうり其中より怖き蛇の
若干来て。罪人を山上に追ひのぼれ其山険退して上ゆべき
ふあるべれ案倦てるに竈の上毒生かりたる大木あり。罪人
どもは大木へ口を先ゆと池上る時に木は枝竈の上へ横
かくゆゑ成ハ是ばり沸湯ふひるゆあり。脇より下落
こゝゆも有て。ゆ折しさけび円ゆ。多ち其熱湯おりく
る虚空へ湧あり。大木も罪人も一時に向の岩石ゆ新

付て若干む間喜ぶて。かくて罪人を渡りの冷河に落入て。
おのゝ〳〵法華のおきなの者共おそる事絶るなし。
不ふそ。とゝ共罪人を亟て迫づきて。我なれ汝が仏母亟
ゞ母也。命亟ワがかくるゝ所をもあらべ。悔恨事を事としく
てうゝにらすゆくワゞ罪まで泳ぶ。汝
世ゝ為りゝバ命を亟ゝ中事後者ゝ。情要を止念仏をとゝ
我跡を留いられすとゝ〳〵べしとゝて。泪をはらくと流しけり。
并行ゝれるゝ地獄ゝ堕る者ゝ。ゝ生にも遇ゞ。紀大切の会仏
をもつとめゞ。我ゝの為ゝ人の為ゝ。今法衣服をもて供ゝ
〳〵ゝ。波をも是をも皆我ゝ〳〵ゝ。

者ゝ或ハ妻子ゝ。ゝ〳〵ゝ。呵ゝ責ゝ。
○又獄卒ども。数多の罪人ゝ足をとりて逆に白。各二人の獄卒
ありて。東方ゝ。法ゝ人の獄卒ハ来。東門より熱湯をつぎ迫ゝ。
ちゝ口よりねゝ中ゝ。ゝ地ゝ落ち。極火りえ上れゝ。罪人ゝ身体ゝ
ゝ〳〵ゝ。ゝ〳〵ゝ。獄卒鉄杖を上にあて。ゝ〳〵ゝ。罪人ゝ
形ゝ。復ゝ。又責ゝ。ゝ事ゝ。
法ゝ者ゝ。ゝ堕ゝ。
○又罪人ゝ。ゝ。獄卒ゝ。沸湯をそゝきこ
わゞたちまち腸門ゝ。ゝ。罪人ゝ。ゝ。
てゝみゞくれゝ。ゝ。ゝ。ゝ。酒

飯ひ者の落る地獄くりと
○又大なる谷あり其中の罪人八百億の所なり億八人を虚空に
倒しゆるされ其数多ふ〳〵獄卒たゞふ〳〵鞭笞を
指あり肛門よりつぎ入れば口より脳髄をうけて地に落猛火と
如てりくとる罪人一度に嘘て天地震動するごとく利
○又地獄あり鉄火車一輌猛火さうにりえあげる其中に一人
の罪人をけおれて燒炷のごとく啼叫であり其中の仏よりも
え汝ゞ又云四部ゆり其身罪悪深重ゆえ故に命いまゞ終おれば
魂さえぞつく悪鬼に捕して叫る苦患を受る自業自得の
まことり是非なき事之実にて責をうくるゆえ安楽に

姿まで大悪病を受く。海嶽なれば云四部ゆり事をたゝしめ法分
み懺悔念佛せさすべし。念佛の功徳ゆえ病人も
快復まべらべし。至誠に念佛を信じ法じるハ。獄中の猛火車の苦
後のゞゞべしさあ〳〵べをのにそうく彼ら悪病も平復すること成ゆえ
と云こと亟〳〵信苦しと成ゆえ悪傷の思いよりもくるべし。五内腸胃
断ゞおとくゞ。ゞち火中に飛入〳〵この苦に代んとするゞ獄卒火車を見
ゞわく引去ゞ。云こと疑せんてこうく胸然として居るゞ。ゆゑ
かしてゞゞげき出〳〵こうる
○又教は去ゆる罪人ありとそゞ八寸の大行まき海〳〵ゞゞすき
間なく立ゆる上流。流既にく追立れ踏拔く走るもあり。又

感得傳

魚ばかりをる者ありとて。池中に罪人ひとり居るを。法の魚にやとて。
ゆるし給ひ。人々。喜びあまりて。鳥をとる者ありとて法
の名花をもりて。罪人の方にとゝめ居くべきせしなり
○或ひとり。罪人を。鉄の柱に。ゆひつけ。獄卒足にて。踏へ。針
抜にて。舌を抜はなす。二尺ばかりぬけあがりけば。居るありゝ。我
里のいまゝ。存命なりし。何某といふる者ありき。常に念佛をゝ
誹謗する者ありとて。ゆへ。名活地獄に。二人。糞湯地獄に。一人。畜生に
なりて。若干人。ありて。其事の問に。三人。死去せり。畜生一人
急伝の功德にて。病も快癒。今にて。存命にてあり。外三人の者。父
にありしが。皆。血涙をながして。獄中にて。猛火にせめられ
ぬ。

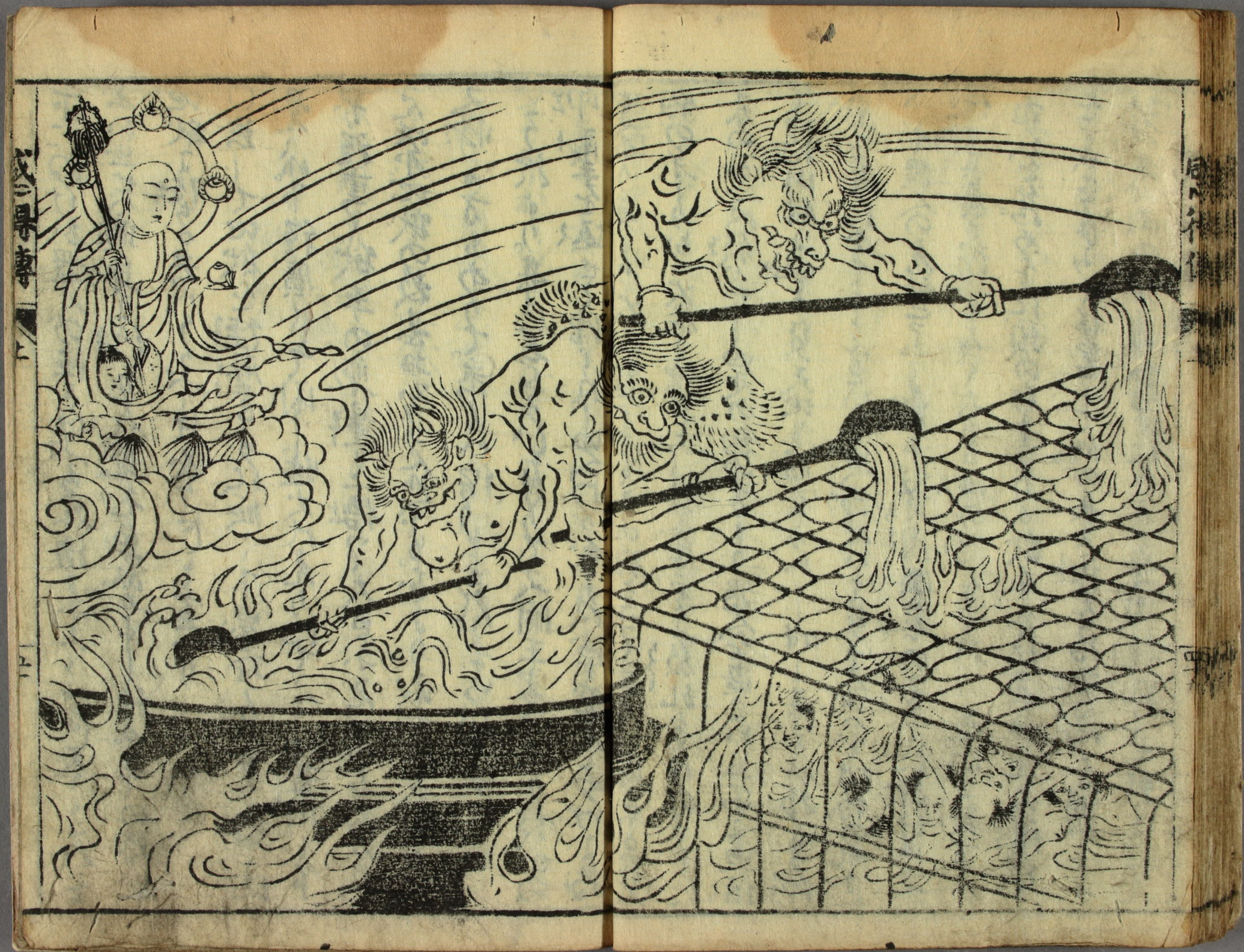
却て。新の問に。別まで。弾よ。魔人。鬼。獄卒。鬼。の問に
大鼓。胸。ふれ。喉。大きゝ。乾て。水。飲。駱。或時。井の
弾。ひか。一度に。大茶碗。十六。盛まで。飲。事ありと
○或。大なる谷ありて。方面。二里。ばかり。有。とゝ。大地。
殺石。鉄。ぶく。実。真上。数万の罪人。或。胴。辨。つき
ぬ。或。鉄。刃。分。たゝ。すこにきり。刻。居。
よ。熱。真。紅。熱。洞。ある。事。大。殺。
罪人。洋。洞。共。盛。水。涌。あぶり。鉄。石。きり。ぶ。
ぶり。殺。ぶ。叫。ぶ。む。ハ。も。止。して。駱。血。池。地獄
あ。ま。ま。に。あり。皆。女人。責。真。数。嘉。

咸宜園傳

咸宜園傳

皮をはがるゝ罪人あり。或ハ罪人を鉄の棚乃上に並べ下より猛火
にて炙らるゝもあり
○或所にハ大さ十間ばかりなる鑊をすへおき。猛火をもやし
罪人を責る。獄卒ほうりて水に投おとせバ鑊をもやし微塵に擣き。
或ハ臼をもつて搗くあるひハ笞をもつて鞭る。或ハ臼にてつき砕くもあり。
その微塵となりしぬかるを。獄卒鉄棒をあげて呪すれバ又本形に
復して焼麻せらるゝ事おのごとし
○又地獄あり。餘獄よりも甚廣大也。此地獄半分ハ剣及空にも
て半分ハ猛火さかんにして空まで上れバ罪人倒に落来て。
猛火に焼れ剣に身を貫れて大に叫ぶ。又其長三里許なる大狗

四足あり。身より火焔を出し口よりも火の焔を吐く。其上に飛来る罪人
狗の牙よりおる火焔に焼き上られて虚空に散乱るを狗おとしに
本の姿になれ数がかし。四足の狗四方より罪人を追まはし一所に追詰
て四狗同時に吼る声ハ天地も崩るゝばかりにして時に其狗の[illegible]印
罪を身にあてゝ宣ひし其当る八ヶ所ゆゑ此狗の吼ることこ
へて罪人の身ちぎれて裂ぬ。骨肉微塵のごとくに砕けぬ。又
條に其廣さ限りもなく大なる鉄の網をはれり其内に数万乃
罪人を籠めて其頭のあたりなる獄卒外に並び居て。大鑊に
をすへをきておく鉄石にて柄の長き杓をもて鉄湯を網の上より
かけゆくバ雨のごとく罪人の身にかゝり。骨肉焼爛して頭よりはじ



下にのけぞ罪人の法さけぶ名花落ちるを見て
ふい出せば遍身より汗ながれ毛穴竪よりしぼる。其の体に
地獄に落ちる者はうらうらすがたと宣つり
○然して地獄を経歴するに吹く下界へ下りゆくに
見えぬ。下経廣して闇し。極大なる者にてこれ。若相も下
界程重く獄卒の身量も一倍つ大きかこれ。上来の不
ふれ不地獄の数甚多しこれ。おのれ古にて速ぐ
又悔る方もありて悉くハ語り中ずこれ。
しう後より。其に来てこれ。又閻王宮へ帰りて
印璽を返せと作られゆべつがたるは安楽ぜんもげる指

糸いろ度ぶいしも閻王乃は新色あまりにたそかれ。其
事ありかつて。玉後さしむ山へ。仲ろ後されし官人う
あとり。奥の方へ指ゆれる。椒幕閻王小れ紺紙の袴ん
しが。大王もこれ後ありそれより其に来てこれ。閻王宮
後出あ。其の鞍小されより汝は西方極楽浄土へ行ん

善之感感

孝子善之感得傳卷上終

但州湯島 中屋長兵衛門

湯嶋村宮本丁
屋敷左衛門